

父の足跡をたどりて

高林 勢津子

今から四十年前、私の父塙晃茂(当時七十才)は腎炎を患つたことのある孫(たなかやか)の長女)が高校受験をするところので、扇ましの手紙を書き始めました。その手紙が二つの間にかかる生きてきた道を振り返るものとなり、たくさん手紙を書き残してくれました。姉のたなかやすじが語る「三度戦争について父と私の物語」はその手紙を元にしたものです。

この度、姉が父の兵籍簿をとりよせたことにようつて、父の三度の応召の様子がさりとへわしくわかつりました。また地図でその足跡をたどると、一兵卒として従軍した父の姿が私の前に立ちあがつてきました。あらためて三度戦争に行つた父を、父の手紙を元にふり返りたことになります。

はじめの召集

昭和七年一月、父は一十五才、独身でした。高槻工兵隊に入隊。五百住村の民家に分宿し、受けとつた軍服は、田の口があるのを用意していたように大正三年のもので、缶詰も大正時代のもの、外套は明治四十二年と印してあるのにねじゆつたようです。戦争の準備が着々とされていたのですね。夜の八時に高槻を出発。沿道のバンザイバンザイの声に送られ、ラッパを先頭に重い背嚢(十五貫)、五十六キロ、強)を背負つて、夜通し天六(天神橋六丁目)をじくじくとしながら歩きました。

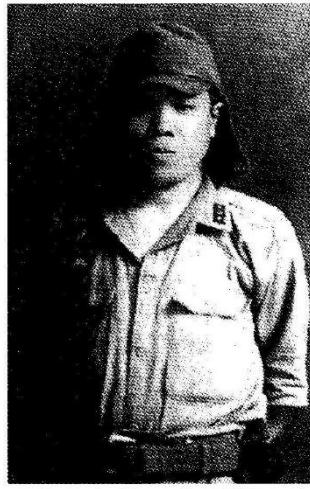
二月六日、大阪港から出港、十一日に上海に上陸。そして上海で

何をしたかといふと、上海紡績工場の社宅の警備でした。当時、日本の財閥は中・國大陸・満州へどんどん進出していったので、日本人が住んでいたところの警備でした。兵舎には寝ぐらもなく、むしろの上に毛布をしきして寝ました。

父は、一十五才まだ体力があつたとは思いますが、どうへ行くとも知らされず、結構な暮りしをしていた在留邦人を守るために召集されたのです。一回日の応召は四ヶ日で日本に帰つてきました。

生前、父は上海だけはむづ一度見たことありました。上海郊外は、トロや八路軍がよく出し危険でしたが、戦闘にはあらず、とにかくして危险でした。

二度目の召集



昭和19年父34才(武漢にて)

たつハイカラな西洋建築の建物が目にやきついていたのでしょう。でもなぜ赤紙一枚で召集され、裕福な暮らしをする人たちを守るために行かされたのかずつ一つと理不尽に思つてしま

した。

三度目の召集

昭和十二年九月、父は二十一才、姉やすじが一才半のとき、広島・宇品港から出港。目的地はどうなのか、いつ着くのかも知りません。船の中は二メートルぐらのといふを板で上下に分けてあり、上に寝る者は梯子を伝つて上へ、下に寝る者は頭を低くして入り、板の上にはゴザが一枚敷いてあるだけ、背嚢などは置かれて寝るのが精一杯で、監獄部屋以下だつたのです。

水にも困り、大海原の海水が飲める水ならば、どんなに助かるかと思わぬ口はなかつたのです。

日本を離れて一週間、船酔いのため寝たきりになる戦友も出て

されました。その後の「」とせ父の手紙を引用します。

一隻の漁船のない島に上陸した。島は、一時停船しました。甲板の上を歩いていたが、四方へ方に船のあかりがあり、発火信号が絶えず送られて何十隻の船が集結していました。船に聞きましたところ『誰にも話せなかつたが、ここは台湾方面の澎湖島です。次の命令を待つてゐるのです』といひみつて教えてくれました。私は勤務についていたから、こんなありとまでも見るにじができたのです。それから三日後でした。夕食に、白ご飯にすき焼きの田舎丼をねらひもで食べた」とのなじ田舎を出しつつ、これまでました。身につくよしにねこしかつたのです。それがわらの類、

明朝敵前上陸を許すので、みんなに元氣を(立派)たまひした。一命酒も配られていじれが呑めの酒かと想つてなんだかさびしへ思われました。朝四時半(いよいよ)でした。舟を定すために甲板へ上がつてゐるとい、海軍の艦砲射撃が御用船(私たちの船)より一歩前に出て、敵地にむかつてしまつたから(いそゞい)るのじゃ。あ、これが戦地かとの(感想)がで(現れて)くる。『今、甲板から下へ潜りゆくよ』といひだしました。

でも、私は見ました。大きな船の裏側から次から次へと小さな上陸用舟艇が海上に流れるように出していくのを、あゝ、日本にもこんな準備があったのか、よくわからんとに積んでいたもんだなあと驚きました。私等もこの船で上陸するのだと思つて叱られながら見ていました。

子で鞆囊を背負い、銃を持つて書々とした海の上へ降りてこのへんです。舟艇は下へ待つていて定員になり次第陸地に向かって出発

私等の乗つた舟は立たぬが、四十分、しかむ浅瀬のため砂浜までつたしものばかり、足の立ともがつかぬ裸やぐらから海へ入りました。靴に海水が入り、銃はぬりやねようじにしてとほとほと砂地までたゞつ着れました。思ひたより茹しき田にあいました。全員上陸、あのせまくへして監獄部屋から大地に足を入れた氣持ちは筆ではあらねせません。でも敵地、しかむの作戦は後で知つたのですが、なぜか山東にはせど遠く裏側で、中国人はよもやしたな所に日本軍が上陸するとは誰にも思つてこなかつたことでしょう。三日あつても完全な道はない、遠浅で船などとも入つてこないとい安心してこたのである。

元より上兵隊は、全国より集まつた名持ち場があつて、我をもひつ

て道をつけ橋をかけて請け負い業のよ
うに各部隊は車輪を通すため全力を
かけたのです。その間次から次へと歩
兵は道なき道を前進するのみで、私等
も先発隊の出発した後、電線をかつき
ながら山を上り下りして一つの部落
に着き、「いいやしきなり」と上陸地點と前
線の電信勤務につきました。その行く
道には人馬の死体がいくつもあり、腐
敗臭が遠くよりして顔をそむけざる
をえない状態でした。部落といつても
すでに中国人は逃げて空き家ばかり、
私等は、土の上にわらを集めて寝床を



作りました。」

地図で確かめると刺繡で有名な広東省・汕头(すわとう)に近い白耶士(ホーリー)上陸でした。中国人たちは予想もしなかったことのから次から次へと日本軍が上陸してきて「わかつた」といひょう。すべてをほいつたし、逃げた人の話を家に押し入り、食料を奪い、残つていた人々は殺されました。「これが侵略するところ」となんだと改めて思つてゐる。

一年三ヶ月間いた広東では、ベトナム国境に近い南寧まで作戦と称して行かれていました。父は通信兵でしたから重い電線をかついで運ぶのですが、中国軍や日本軍の進撃を阻むために深い戦車壕を掘り、日本軍が進むと三の上から迫撃砲を撃つてくる非常に危険な行動でした。

野戦病院では、両足を貫通した傷で立れない人や、両眼を白い包帯で包まれている人、荷札をつけられ送られていく人たちがたくさんいて、みんな一枚の赤紙のためにこんな運命になつてしまつたと、父は嘆いていました。

私は思います。大切な人の命がこんなにも軽くあつかわれる戦争って何なんだと憤りをおぼえます。南の方へ行った戦死者の多くが餓死だったことを大人になつてから知り、じりじりと泣きを受けました。

父は昭和十五年十一月、香港の近くの港から大阪港へ、無事帰つてきました。三十九年になりました。

三度目の召集

昭和十九年、父は三十七歳、姉が七歳のとき、三度目の召集令状が来ました。「小艇は歸つていられないかもしさ」ところの父を、姉は相模原めでねばあわやさんと一緒に会つて行つてゐる。

父は、門司、釜山、鶴綠江を渡り安東(丹東)、山海關、徐州、南京へと、南京から船で武昌(武漢)へ、ところが武昌に上陸できません。これがわかり、途中で下船して四キロメートルの道を行軍しました。歩けなかつたら死ぬしかないと、荷車の後ろに縄をつなぎ、自分の身体につなげて歩かされたのが一番辛かつたと回想しておられます。

本当に戦況はわからぬなか、夜中に中国軍が三十本ほど電柱を切つてしまつたので、その補修に出たり、飛んでくる戦闘機にねらわれたりしました。しかしまあかの敗戦で、中国八路軍の捕虜になりました。

毎日毎日土方のよつた仕事を命令されいやつてしまつたが、お金は一銭もなさうで、呪つてこた蚊帳の下に黒い純綿の布がついてじゆのこぼつて、黒い部分をはさみで切り、その布をお腹に巻いて売りに行き、酒と豚(肉)を買って帰つた日もあつたようです。

「お父さん、やつたね」と叫んであげたのですが、今回、兵籍簿を見つめると、なんと一十年ぶりにマリコヤにかかり武漢の北百キロの毒穀と云う街に隔離されたことがわかりました。じたなるにして運ばれたんだから、したじこし心細かつただらつて思つてゐます。父はマリコヤのことは一毫も言わなかつたのですが、復員しておこしやすい熱を出したことが一回あつたと姉が語つてこないので、やせつマリコヤ熱だつたのでしょうか。

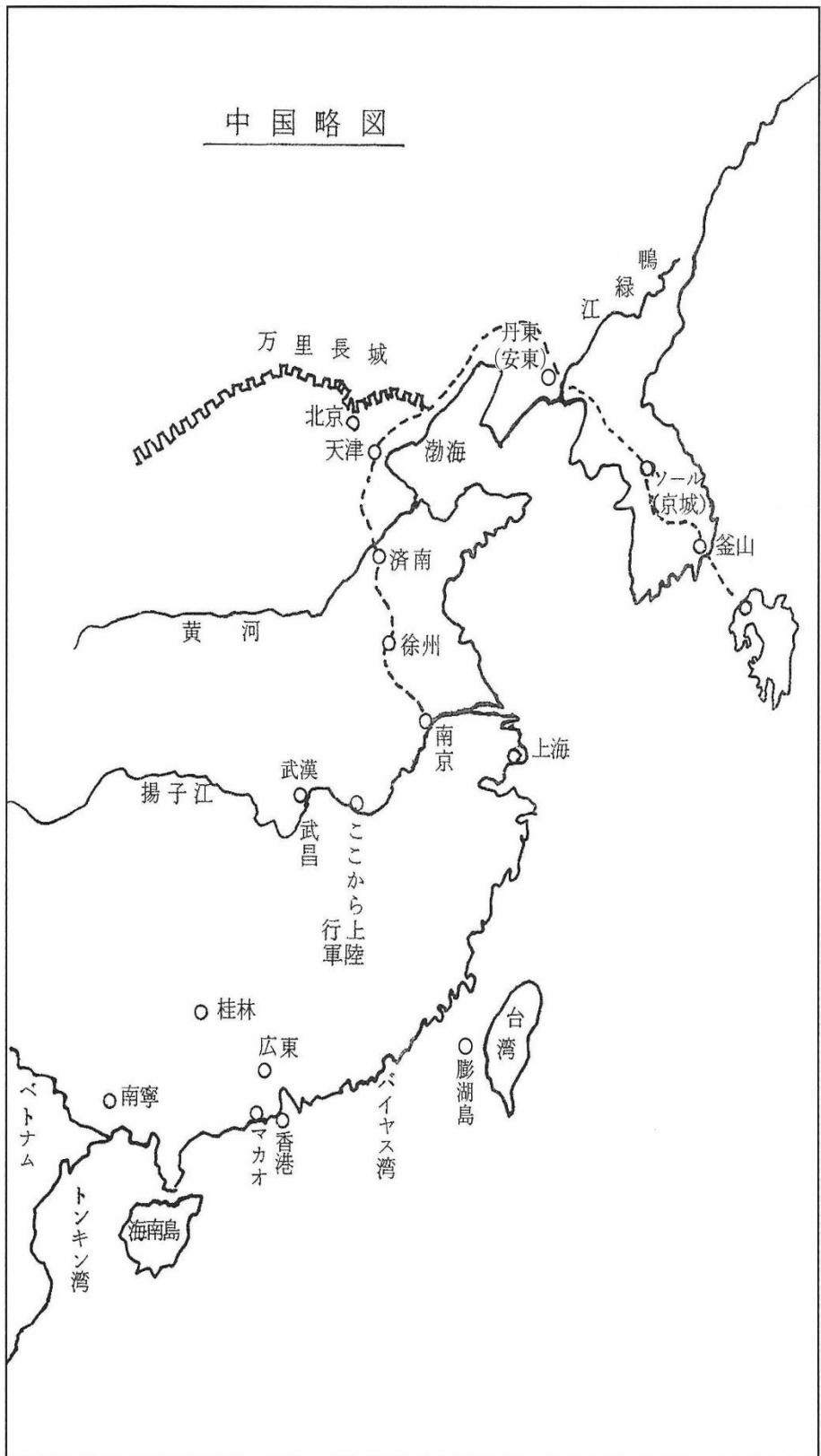
あるとも、路軍の将校の部屋のドアが終わり、壁にはつてある地図を見て、父に、「掃除はすみましたか。」の地図はあなたには必要ありません。見たことないにある事も誰にも話してはなりません。戦争は終わつて、あなた達は船の便がつか次第、日本に帰れるでしょ。それで体を大切にしなさい」と立派な日本

語で言われたとき、嬉し涙で一杯になりました。

いつも、姉の話がじょうめぐれると、私も涙が出ます。やつと生きて日本に帰るとわかつた瞬間ですから、父がどんなに嬉しかったことか、私も父が言つたように「謝謝（ありがとう）」と言いたくなります。

昭和十一年六月、上海から鹿児島へ無事帰つてきました。桜島の煙を見たとき、本当に日本へ帰つたんだや、生きて帰つてこれでうれしかつたと聞つてしました。父は三十九才になつていました。

中國略図



第1回召集 大阪港→上海→大阪港

第2回召集 広島→バイヤス湾→広東→南寧→大阪港

第3回召集 門司→釜山→丹東→徐州→南京→武漢→上海→鹿児島

履歷

四月十日教育省典ノタメ電信第一聯隊第一小隊二入營○七月九日召禁輪歸
年和昭四年
那須七兵衛五月元日桂日吉久貞多集
二級御入云見人被卷出免云桂自吳被卷上陸同月同日
上省著落五月十四日被卷之次不_レ五月三十日上陸出免大月四日
大政奉公參議大月八日召禁輪歸
九月一日動員下令○九月十五日王大臣四時
九月十五日野戰電信才大中馬鹿貝子命大十
百早品漢生參議十一月十日自耶士考拉拉杜背
三十三十
蘭後志平政略參議參加○十二月七日公平參議參看

今回、父の兵籍簿から、一十五才から三十九才まで三度にわたる従軍の日々を辿つてしまい、父の大半な一十代三十代を赤紙一枚で奪つてしまた戦争ですが、でも父は生きて帰つていられたんだから、せんじゅによかつたと思いました。また同時に、広い中国のいたるところにしつこく侵略し、しつぱしかどりにことをする日本軍とたたかわなければならなかつた中国の人々への、あやまつしもあやまつぎれない思いでござります。

私が大学で中国語を専攻すると決めたとき、父は複雑な思いだつたかもしれません。せめて、私が生きている間、中国語を大切にして、少しでも平和な社会であり続けるために努力していくたいと思ひます。

戦後、貧困の底のなかでも、愛情こめてくれた父母、そして書も残してくれた手紙や、平和の大切さを私の勤務する小学校に語りこえてくれた」としても、今は感謝しかありません。ありがとうございました。お父さん!